

慶安二年刊卷子本『和漢朗詠集』について： 松花堂昭乗筆本の開版をめぐって

YAMAGUCHI, kyoko / 山口, 恭子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

91

(開始ページ / Start Page)

40

(終了ページ / End Page)

55

(発行年 / Year)

2015-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012739>

慶安二年刊卷子本『和漢朗詠集』について

——松花堂昭乗筆本の開版をめぐる——

山口 恭子

はじめに

十一世紀初め、藤原公任によって編まれた『和漢朗詠集』¹には、和漢の秀句・秀歌約八〇〇首が収められている。同書は広く享受され、多くの転写本が生まれた。そのなかには能書が筆をとったものも多く、今日『和漢朗詠集』の最善本とされる藤原行成筆「粘葉本和漢朗詠集」をはじめ、同「雲紙本和漢朗詠集」、同「近衛本和漢朗詠集」など、名筆とされる例は枚挙にいとまがない。『和漢朗詠集』の写本は、書芸術とも密接に結びついているといえよう。

また、近世に入ると、『和漢朗詠集』は数多く開版されてゆく。頭注や挿絵が施されるなど刊行のスタイルは多様化し、一方では、定家流、御家流といった書流の名を冠した手本としての出版も相次いだ。近世においても『和漢朗詠集』は、詩歌集

として、あるいは書文化と関わるものとして広く流布していったということになる。同書の広がりや享受、存在意義は、それら多様な側面にわたる広い視野でその様相を考える必要があるといえるだろう。

そうした視点のもと、稿者はかつて、寛水の三筆のひとり、松花堂昭乗（天正十二年—寛永十六年（一五八四—一六三九））筆の『和漢朗詠集』について考察を試みたことがある。¹前稿では、とくに、慶長十七年（一六一二）写『和漢朗詠集』（法政大学文学部日本文学科蔵）、および、近世前期、昭乗の筆跡と銘打って開版された『和漢朗詠集』二種（慶安二年（一六四九）刊本、承応二年（一六五三）刊本）について取りあげ、それらの本文系統を中心に検討した。

その後、右記版本のうち、慶安二年刊本に関する新たな知見を得たため、本稿においてその報告を行いたい。加えて、同本制作の背景や後世における享受について探りつつ、昭乗の筆にな

る『和漢朗詠集』が、摸刻され、時代を越えて流布してゆくこととなる様相の一端をみてみたいと思う。

一、松花堂昭乗筆『和漢朗詠集』と近世刊本

まずは、前稿の概略を記しながら、昭乗の『和漢朗詠集』について眺めておきたい。

昭乗筆の『和漢朗詠集』は、現在、京都国立博物館所蔵「和漢朗詠集」(二卷)^①が広く知られている。雲母で文様を刷った料紙に、『和漢朗詠集』の漢詩句と和歌を各六首書いた抄写本で、このうち、和歌二首を定家様で書くという趣向を凝らした作品である。また、かつて小松茂美が、下絵の施された料紙に漢詩句十三首、和歌十一首を書いた「和漢朗詠巻」を紹介しており、さらに、色紙七十二枚に詩歌を散らし書きした「和漢朗詠集貼交屏風」(建仁寺禅居庵蔵)も残る。このほか、熊谷直蔵本、上神家蔵本、元和五年(一六一九)写本、寛永六年(一六二九)写本等の存在も伝えられる。佐藤虎雄が、「(昭乗の)書写のよく遣れるものには『和漢朗詠集』『歌仙色紙』『歌合』等がある」と述べたように、『和漢朗詠集』は、昭乗がよく好んだ作品のひとつであったといえよう。

こうした昭乗筆『和漢朗詠集』のなかでも注目されるのが、慶長十七年写本である。同書は、綴葉装一帖に、八〇四の詩歌を収める完本である。土井忠生、ならびに山田忠雄が、『和漢朗詠集』の本文系統を考究するうえでひとつのよりどころとした「盧橘」本に該当し、室町期に主流であった本文の要素をべー

スにしつつも、ひとつの系統にとどまらない独自の本文を有するものである。

一方、昭乗筆『和漢朗詠集』の摸刻も、近世前期から行われていた。まず、慶安二年刊『和漢朗詠集』は、右記慶長十七年写本と同系統の本文をもつものである。ただし、慶長十七年写本に書かれている歌人注記や詩題注記はなく、手本としての色合いを強めている。次いで、承応二年には、これとは別版の『和漢朗詠集』も刊行された。江戸時代中期以降広く流布していた、尊円親王筆本を原本とする『和漢朗詠集』(正保五年(一六四八)刊)系統の本文に基づきながらも、慶安二年刊本の本文の一部、および字形を継承している。これら慶安二年刊本、および承応二年刊本には、求版本や覆刻本、付訓本が存在しており、昭乗筆『和漢朗詠集』が近世を通じて受容され続けたことがうかがえる。

二、慶安二年刊卷子本『和漢朗詠集』の書誌と版行

前章において、昭乗の『和漢朗詠集』について概観してきたが、本章以降では、このうち慶安二年に刊行された『和漢朗詠集』に関し検討を進めてゆきたい。

昭乗を祖とする書流である瀧本流(松花堂流・式部流とも)の手習い手本は、近世前期以降数多く開版されており、それによって流派は学習者を増やし盛行したと考えられる。早くは、正保二年(一六四五)刊の名筆摸刻集『本朝名公墨宝』(国会図書館等蔵)下巻に昭乗の筆跡が収録された例があるが、

昭乗の書のみを摸刻し版行した嘯矢は、慶安二年刊『和漢朗詠集』ということになる。後に、瀧本流門人であった漢学者細合半齋（享保十二年—享和三年（一七二七—一八〇三））が、「書名遠きに聞こえ、門人諸国に遍し」（『瀧本葉』寛政八年（一七九六）刊。国立国会図書館蔵）と述べるほどであった瀧本流の一起点として、慶安二年刊本はとりわけ重要な位置にあるといえるだろう。

慶安二年刊本はこれまで、本文も、また書誌的側面においても、特異な本として取り扱われてきた。同書に関する従来の研究を以下にまとめておく。

まず、本文についてであるが、鈴木健一、藏中しのぶは、近世に刊行された『和漢朗詠集』の本文に関する論考において、慶安二年刊本が、数多い『和漢朗詠集』版本のなかでも独自の本文をもつものであることを指摘している。なお、これに関しては、既述のように、慶安二年刊本が慶長十七年写本と同系統の本文をもつことを前稿において述べた。

一方、その書誌については、流布した形態である冊子本のほか、同じ慶安二年の刊記を有する卷子本の存在が報告されている。これまで、大阪古典会創立九十周年記念古典籍善本展観図録『濔標』¹⁸、および青裳堂書店古書目録『和漢朗詠集の版種』¹⁹にこの慶安二年刊卷子本の写真が掲載され、さらに、『和漢朗詠集の版種』では、慶安二年刊冊子本は、それに先だって制作された卷子本の覆刻であるとの指摘がなされた。また、近年では、神作研一がこの卷子本について、『和漢朗詠集』の刊本としても、ひいては歌書刊本としても唯一の卷子本」と、その特

殊性に言及している。¹⁸

前稿では、この慶安二年刊卷子本について、『和漢朗詠集の版種』および神作の言説を引用するにとどまったが、その後、新たに岡本聡氏所蔵本の調査の機会を得ることができた。以下、まずはこの岡本氏蔵本についての報告を行う。次いで、その書誌的特徴などを踏まえたうえで、慶安二年刊卷子本から、同冊子本への流れをあらためて確認することとしたい。

岡本氏蔵慶安二年刊卷子本は上下二巻二軸からなり、漢詩句五八八首、和歌二一六首、都合八〇四首の詩歌を摸刻する。書誌は以下の通りである。

『和漢朗詠集』 二巻二軸（岡本聡氏蔵。以下、「岡本氏蔵本」とする）

上巻、全三十六紙。高さ三十三・〇糎、長さ一五八九・四糎。下巻、全四十紙。高さ三十三・〇糎、長さ一七九九・八糎。字高約二十七・五糎。上下巻前見返しに金銀箔散文様、下巻後見返しに金泥草花文様を施す。内題「倭漢朗詠集卷上」「和漢朗詠集卷下」、尾題「和漢朗詠集上」「和漢朗詠集終」。訓点・作者注記・詩題注記無し。本文末に「雄徳山北庄昭乗（花押）」。刊語「松花堂主盟惺惺翁親遡洄／空海大師筆道三十二伝之波瀾而高透／過三級之禹門孰可攀金龍一鱗塵蠹測／其余流之徒以真筆為偽以偽筆為真一／部朗詠漢字倭字翁之所筆刻以鏤梓本／是驪龍領下之明珠後人奪而作自己家／珍珍重書而為跋」。刊記「慶安二龍輯丙孟春如意珠日 瓢型印（宗次）・方形印（離匏）」。

『和漢朗詠集』の詩歌を摸刻し、各巻十五メートルを超える

長大な卷子本に仕立てたもので、刊語によれば、昭乗の書を学ぶ者たちが昭乗の書跡の真偽を判別できていないという現況をかんがみ、「驪龍領下之明珠」ともいいうべく貴重な本作を摸刻したという。「宗次」「離匏」については不詳である。

この岡本氏蔵本と、『和漢朗詠集の版種』掲載本（以下、「版種」本とする）の図版とを比較してみると、巻末部に相違のあることが認められる（図1）。以下にその具体を示したい。

まず、署名部分であるが、岡本氏蔵本では、「雄徳山^註昭乗」と行書体で刻し、さらには下方には花押も摸刻されているのに対し、『版種』本では、「雄徳山比丘惺々翁」と隸書体で刻し、花押はない。また、刊記部分では、岡本氏蔵本が慶安二年の干支を「丙^註」と誤るのに対し、『版種』本では、「己^註」とする。さらに、印についても、岡本氏蔵本では瓢型印・方形印の順に捺されるのに対し、『版種』本では、方形印・瓢型印の順に捺され、印のデザインや字形にも差がある。『和漢朗詠集の版種』に掲載された図版に依る限り、岡本氏蔵本と『版種』本は同版で、署名、および刊記にのみ修訂が施されているものとみられる。両本の先後関係としては、岡本氏蔵本が先行し、刊記の干支を修正するにあたり、署名や刊記全体、および印に変更を加えて刷られたのが『版種』本であると考えたい。

なお、これまで管見に入った慶安二年刊冊子本には、天理大学附属天理図書館吉田文庫蔵本、四天王寺大学図書館恩頼堂文庫蔵本、陽明文庫蔵本があり、そのほか、天明四年（一七八四）九月求版芝翠館刊行の九州大学文系合同図書館相見文庫蔵本、刊語までが刻された無刊記の明星大学人文学部日本文化学科蔵

本、都立中央図書館加賀文庫蔵本、酒田市立光丘文庫蔵本がある（加賀文庫蔵本、光丘文庫蔵本は別版）。上記のすべての伝本において、昭乗の署名部分は『版種』本と同じ隸書体「雄徳山比丘惺々翁」であり、また、慶安二年の刊記を有する吉田文庫蔵本、恩頼堂文庫蔵本、陽明文庫蔵本は、それを「慶安二龍^註輯^註孟春如意珠日」としている。現時点では、慶安二年刊冊子本として流布したのは、『版種』本から派生したものののみとみてよいようである。

ここで、先掲元和五年写「和漢朗詠集」についてあらためて取りあげたい。同書は、昭和四年（一九二九）、京都美術倶楽部において開かれた入札会の目録「中京杉浦家所藏品入札」に掲載された。卷子二巻からなり、「三十六人歌合」とともに書写されているという。同目録に載る巻末部の写真からは、朗詠題「恋」「無常」「白」の詩歌が書かれていることを確認でき、したがって、この元和五年写本は完本であると思われる。訓点や作者注記、詩題注記はない。そして、尾題「和漢朗詠集終」に続き、以下の奥書がある。

此朗詠者橋成政年来依／所望染筆毫以与之一日于軸／末乞
記予辞不能拒辞応／責彰於楮尾嗚呼慙汗焉／予写伝／二聖
三賢之筆適臨両／二四輩之墨池雖然刻舟／守株之愚如鑊氷
似画水／大師有云道之興廢人／之時非時矣／道待人蹟人以
時学□間／至奇哉／元和己未仲夏下旬／弘法大師三十二葉
／雄徳山比丘昭乗（花押）

これにより、同書が橋成政の求めに応じて書されたものであったことがわかる。昭乗は、「百人一首色紙帖」⁹（慶長十六年

(一六一)。(八幡市立松花堂美術館蔵)、「長恨歌」(慶長十九年(一六一四)。東京国立博物館蔵)などのように、他者の求めや命によって筆を執ることが少なくなき、これもそうしたもののひとつだったのだろう。

注目したいのは、この元和五年写本が、慶安二年刊卷子本と極めて近いことである。右掲元和五年写本の奥書は慶安二年刊卷子本にはなく、慶安二年刊卷子本には、先に示した刊語が刻されているという違いはあるものの、朗詠題や詩歌の字母、詩歌の行替えはすべて同一であり、加えて、朗詠題・詩歌・尾題の字形、さらにはそれらを配置する余白のとりかたにまで近似性が認められる。元和五年写本の実物を未確認であるため即断は避けなければならないが、現時点において、慶安二年刊卷子本が、元和五年写本をもとに摸刻された可能性は高いと思われる。

さらにいえば、元和五年写本の奥書の署名「雄徳山庄昭乗」ならびに花押が、慶安二年刊卷子本のうち、岡本氏蔵本のそれと共通することも特筆される。元和五年写本が、慶安二年刊卷子本の原本であるとすれば、この署名における共通性もまた、岡本氏蔵本が昭乗筆本に隣接するものであり、その後「版種」本が続くとの推測を支えるものとなるだろう。

なお、元和五年写本奥書は、「大師有云道之興廢人之時非時」と、「性靈集」巻四「猷東太上李邑書迹表」からの引用をもって綴られ、また、「弘法大師三十二葉／雄徳山庄昭乗」とするなど、昭乗の、空海存在と筆道に対する意識や、それを継ぐ者としての自負を感じさせることも興味深い。というのも、慶

安二年刊卷子本には、随所に大師流の書表現が見られるからである(図2)。大師流は昭乗の書の特徴のひとつであり、「阿房宮賦」(昭和美術館蔵)、「詩巻」(東京国立博物館蔵)、「劉禹錫図」(陋室銘)²³(八幡市立松花堂美術館蔵)など、現存する昭乗の作品中に多くみられる。慶安二年刊卷子本では、これらの作品のように大師流が際立って駆使されているわけではないが、意識的にその筆法を用いていることは確かであろう。元和五年写本が慶安二年刊卷子本の原本であるとの仮定に立ち、さらに、元和五年写本の奥書や署名をあわせ考えてみると、慶安二年刊卷子本に大師流の書表現が散見することは、必然性のあるものとして受け止められはしないだろうか。

以上述べてきたことを整理すれば、元和五年写本かと思しき昭乗筆本から、まずは慶安二年刊卷子本のうち岡本氏蔵本が摸刻・印刷され、それに修訂を加えて『版種』本が刷られ、さらにそれを覆刻して成ったのが慶安二年刊冊子本ということになる。寛永期、昭乗周辺で読まれていた慶長十七年写本系統の『和漢朗詠集』本文は、このような道筋で版本の世界へと流れ込んでいったのであった。ここからは、『和漢朗詠集』のもつ詩歌集としての性格と、手本としての性格とが、昭乗という能書周辺で重なりあいながら、新たな伝本を派生させていった様をうかがうこともできよう。

三、慶安二年刊卷子本『和漢朗詠集』制作の背景

ここまで、慶安二年刊卷子本の書誌的事項に基づきながら、

慶安二年刊冊子本への流れを確認してきた。しかし、そもそもなぜこのような卷子本が制作されたのか。冊子本と同様、慶安二年刊卷子本も手本としての性格を有していることに違いはないが、その存在にはいささかの疑問が残る。本章では、同書の制作者・享受者像について考えてみたい。

慶安二年刊卷子本は、神作研一が「卷子は最初に調製された『特装版』で、「特定の誰かに向けて作られた可能性もあ」と指摘するように、商業性を目的としたものではなかったと推測される。これはすなわち、昭乗の筆跡を必要とする、ごく限られた者に向けて私的に作られたものであったことを意味しているよう。

ここで想起されるのが、当時の瀧本流の書法教授の形態である。川畑薫は、松花堂流の教授体系について詳細に論じ、そのなかで、昭乗の高弟・藤田友閑（慶長五年―延宝五年（一六〇〇―七七））らの筆道伝書に基づきながら、流派内で版本手本が重視されていたことを究明した。川畑の論考に導かれつつ、友閑の言説を引いておこう。

手本は松花堂の御筆によりて習ひ侍らん事最上たるべしといへども、世に稀なるをいかゞはせん。金なき時は銀を宝とせよと仏語にも侍れば、諸子の為によろしとおもふ法帖を求めて、写すのりを詳にし、上巧の彫師に仰て、たがはざらん事を精密にさたし板刊にちりばめて授侍り、（『和国筆道三秘鈔』寛文三年（一六六三）成。国立国会図書館蔵）

友閑は、昭乗の筆跡を忠実に模刻した版本手本を用いることの重要性を説く。友閑は右掲書のほか、『示恩息乗因及同志学者

教誡條章』（寛文四年（一六六四）成。天理大学附属天理図書館蔵）などの自著においても同様のことを繰り返して述べている。加えて、友閑は自ら手本の開版を手掛けてもいた。「百官表」

一卷（慶安二年刊。国文学研究資料館蔵）もそのひとつである。同書は、昭乗筆「諸国」「京條里」「官名」を模刻したもので、刊記に「慶安二年春於撰州富田刊焉 藤田彩雲（友閑）翁（印）」とある。同書が、『和漢朗詠集』と同じ慶安二年に開版されたものであることは興味深い。また、西尾市岩瀬文庫の所蔵になる『松花堂法帖』（享和二年（一八〇二）刊）も、友閑の開版した手本とのかかわりが深い。これは、昭乗筆「四恩法帖」「勸進帳」（二種）「漁父辞」「国名 京條里 官名」を刻すもの。「右法帖者署友閑翁所上梓而／今復倣其例再刻之則以為／門人之龜鑑耳／享和二戌年 南呂 曉松堂鈍壽（印）（印）」とあり、かつて友閑によって刊行された手本が、曉松堂鈍壽（神立愚鈍）によって再刻されたものであるという。

こうした、瀧本流における版本手本の奨励、また、実際に版本手本が積極的に制作されていたという状況は、きわめて示唆に富む。当時の、師昭乗の書への向き合い方をめぐる指向は、昭乗筆『和漢朗詠集』の印刷をも推し進める背景となっていたのではなかったか。慶安二年時の『和漢朗詠集』の版行もまた、昭乗に近い人物によって試みられたものであり、かつその享受者は、おもに当時の瀧本流門弟たちだったのでなかったかと思像されるのである。

江戸時代の卷子本について、鈴木淳は、「古典的な教養、娯楽に関わるもので、実用書の類とは対極に位置するものという

ことができる」と述べているが、慶安二年刊卷子本も、後に流通する実用的な冊子本とは別の位置づけにあるといえる。慶安二年刊卷子本は、結果的に昭乗筆『和漢朗詠集』から、流布本である冊子本『和漢朗詠集』への橋渡しの役割を果たしたが、同書そのものは、量産型の手本のような、単なる肉筆の複製というもの以上の存在価値があったはずである。昭乗の揮毫した『和漢朗詠集』の筆跡を忠実に再現するのみならず、装訂もそのままに、師の書を総合的に蘇らせようとしたものではなかったか。

ここで、神立愚鈍筆「書法写」(八幡市立松花堂美術館蔵)の存在について触れたい。愚鈍は、瀧本流門弟のひとりであり、自らも弟子をもつ一方、『瀧本常盤帖』(明和八年(一七七二)刊)、『五筆花法書』(明和八年刊。架蔵)等、瀧本流手本の編纂を手掛けた。先掲『松花堂法帖』も、近世前期に友閑が刊行した手本を愚鈍が再刻したものである。このほか、瀧本流門弟たちの略伝を列記した『松花堂書法道統伝』(宮内庁書陵部蔵『片玉集』巻七十二「所収」)の著作を残すなどしており、近世中期から後期にかけて、とくに瀧本流の普及に大きな働きを果たした人物と考えられる³⁰。

その愚鈍の筆にかかる「書法写」は、「小倉山庄色紙和歌」一卷、「和漢朗詠集」二巻からなる。前者「小倉山庄色紙和歌」(安永四年(一七七五)写)は、朱で色紙型をかたどり、そのなかに『百人一首』の和歌を散らし書きにしている。友閑の子であり、昭乗の高弟であった藤田乘因筆本を模刻した『小倉山庄色紙和歌』(西尾市岩瀬文庫蔵)を模写したものである³¹。

他方、「和漢朗詠集」二巻では、朱で天地横界を引き、上巻に四十、下巻に二十八の朗詠題を掲げ、各題につき、漢詩句を一ないし二首、和歌を一首ずつ書している。内題や目録、作者注記等はなく、各巻末には「芙蓉峯隱士慕松堂書(印) (印)」とある。

この「和漢朗詠集」も、「小倉山庄色紙和歌」と同様、版本手本に倣ったものと想像されるが、ほかならぬ慶安二年刊『和漢朗詠集』との近似性をうかがうことができる。愚鈍は、慶安二年刊本のような行書きにとどまらず、詩歌の配置に工夫を凝らしているものの、文字の造形や連綿などに共通性が認められる(図3・A)。朗詠題「祝」の漢詩の楷書体、同じく和歌の連綿をおさえた書きぶりなども顕著な例だろう(図3・B)。また、慶安二年刊本の本文と比較してみると、愚鈍写本には一首の途中までしか書いていない漢詩が三首³²、脱字が二か所あり、また、朗詠題「仏事」の和歌が、同「閑居」に書写されるといったことが主な差としてあげられるが、ほかはほぼ共通する。さらに、使用字母もそのほとんどを同じくしている。

愚鈍の依拠したものが、慶安二年刊卷子本であったか、あるいは、冊子本であったかは定かではない。しかしながら、「松花堂法帖」の例にみるように、近世前期、流派内で開版された手本を再刻しうる立場にあった愚鈍であれば、卷子本をよりどころとしていた可能性は大いにあるだろう。また、「小倉山庄色紙和歌」巻において朱で色紙型を摸したように、「和漢朗詠集」の天地の界も、卷子の形態をかたどったものかもしれない。いずれにせよ、慶安二年刊『和漢朗詠集』は、時代が降っても、

門弟たちにとつての師の筆の規範のひとつとされ続けていた。

四、瀧本流における『和漢朗詠集』——門弟の書、

および名筆摸刻集など——

ここまで、慶安二年刊卷子本『和漢朗詠集』について検討を試みてきた。他方、これまで触れてきた作品のほかにも、瀧本流門弟らが揮毫した『和漢朗詠集』は数多く、また、版本の瀧本流手本等のなかに、『和漢朗詠集』の詩歌が収録された例も少なくない。最後に、それらの書作品・手本類について整理しておくこととしたい。

まず、門弟たちが揮毫したとされる『和漢朗詠集』については、管見にはいった主な作品には以下のものがある。掲出のものはいずれも抄写本である。

- ・豊蔵坊信海筆「二家法書」(東京国立博物館蔵)
- ・豊蔵坊信海筆「和漢朗詠抄」(『日本書跡大鑑』十九卷所収)³⁴
- ・法童坊孝以筆「和漢朗詠卷」(八幡市立松花堂美術館蔵)
- ・法童坊孝以筆「和漢朗詠集」(四天王寺大学図書館恩頼堂文庫蔵)
- ・法堂坊孝以筆「和漢朗詠集」(『日本書跡大鑑』十五卷所収)³⁵
- ・中村久越筆「朗詠」(四天王寺大学図書館恩頼堂文庫蔵)
- ・平野仲安筆「和漢朗詠集抜粹」(寛文八年(一六六八)写。柿衛文庫蔵)
- ・藤田乘因筆「朗詠抄」(寛文九年(一六六九)写。四天王寺大学図書館恩頼堂文庫蔵)

・平野仲安筆「詩歌卷」(延宝五年(一六七七)写。八幡市立松花堂美術館蔵)

・神立愚鈍筆「書法写」のうち「和漢朗詠集」(八幡市立松花堂美術館蔵)(前掲)

愚鈍写本をのぞいて、必ずしも慶安二年刊本に倣うものではないが、門弟たちもまたそれぞれに『和漢朗詠集』を愛好していたことがうかがえる。たとえば、平野仲安筆「和漢朗詠集抜粹」は、漢詩の一部に極端な大師流を用い、大きく筆致を跳ね上げた装飾的な表現を駆使する。『和漢朗詠集』を素材とする書の多くは、漢字と仮名、漢詩と和歌とが調和するものであるが、本作では、異質なものが隣り合うゆえの表現の落差によって、独自の響き合いを生んでいる。

他方、『和漢朗詠集』の詩歌が、瀧本流の版本手本のなかに抄録されている例も少なくない。たとえば、『松花堂氣霽帖』(寛政五年(一七九三)跋。架蔵)は、『和漢朗詠集』の詩歌三十二首を収めたものである。同書に付された須原屋佐助「金花堂蔵板目錄」中には、「瀧本氣霽帖 一冊 狸々翁真蹟」此書は朗詠の詩歌を抄出して狸々翁のうるはしく書給へるなり」との文言が見え、昭乗の書いた『和漢朗詠集』詩歌であることを喧伝している。このほか、『学半臨書帖』(寛政元年(一七八九)刊。内藤記念くすり博物館蔵)のように、詩歌一首ずつではあるが、細合半斎による、瀧本坊乘淳筆『和漢朗詠集』の臨書を取めている例もある。

また、瀧本流手本ばかりではなく、名筆摸刻集の類にも昭乗筆『和漢朗詠集』は収められていった。前掲『本朝名公墨宝』

下巻に収録された昭乗の書は、『和漢朗詠集』の詩歌と瀟湘八景の詩の一部であり、『和漢朗詠集』からは、漢詩句と和歌をそれぞれ十八首ずつ摸刻している。同種の摸刻集『和漢筆仙集』(貞享二年(一六八五)刊。秋田県立図書館蔵)にも、昭乗筆『和漢朗詠集』の詩歌四首が摸刻されている。

なお、このうち、『本朝名公墨宝』に所収された『和漢朗詠集』詩歌には、本文にも注目するべき点がある。同書には、朗詠題「落花」の詩「朝踏落花相伴出 暮随飛鳥一時来」(傍線は稿者による。以下同)を収めるが、『和漢朗詠集』伝本では、傍線部を「帰」とするものが多い。前稿に示したように、「暮随飛鳥一時来」は、管見の範囲では、慶長十七年写本、および慶安二年刊本にのみ見られる詞章である。また、同じく所収される、朗詠題「山家」の和歌「山さとはもの、さひしき事こそあれ 世のうきよりは住よかりけり」は、藏中が、慶安二年刊本以降の版本から多くみられるとした本文と同じで、さらに遡れば、慶長十七年写本も同型である。これらの例から、近世初期、昭乗周辺で読まれていた慶長十七年写本系統の本文が、一部ではあるものの、慶安二年以前より名筆摸刻集を介して版本の世界に入り込んでいたことがうかがえよう。

おわりに

以上、慶安二年刊卷子本『和漢朗詠集』を中心に検討してきた。元和五年写本と思しき昭乗筆本から、卷子本のうち岡本氏藏本が摸刻され、『版種』本を経て、冊子本へとつながってゆ

くことを指摘した。また、その摸刻は元来、昭乗筆本の忠実な再生を主眼としたものであり、瀧本流門弟らにむけた営みであったと想像されることにも言及した。

本稿でも触れたように、慶安二年刊卷子本に続く同冊子本は、その後の瀧本流手本の開版と流派の流行とを呼び込むものであり、なおかつ、冊子本そのものも、数次にわたって版行が繰り返されてきた。こうした展開にまで目を向ければ、昭乗筆『和漢朗詠集』が、写本から版本へ、そして、卷子本から冊子本へと、書物としての形態と享受者層を変えながら、しだいに流通の範囲を広げ、やがては数多くの手本の刊行と結びつき書流の盛行へとつながっていった様相がみえてこよう。

近世、書の世界も、写本と版本とが共存する時代に移行してゆく。名筆の印刷・再生という事象は、近世の書文化や文字文化を考究するうえでさまざまなテーマをはらんでいよう。そして、それは時に『和漢朗詠集』のように、文学作品の流布と切り離して考えることができない側面をもっている。

付記

ご所蔵資料の調査、および写真の利用をお許しいただきました岡本聡先生に心より感謝申し上げます。また、資料調査にご高配賜りました諸機関に感謝申し上げます。

本稿は、平成二十六年年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費(基盤研究(B))「日中比較による書学資料の文献学的研究」(代表者菅野智明、研究課題番号24320066)による研究成果の一部である。

注

- (1) 拙稿「松花堂昭乗と『和漢朗詠集』」—慶長十七年写本、および近世前期刊本を中心に—(中野三敏・楠元六男編『江戸の漢文脈文化』竹林舎、二〇一二年)。以下、本稿における「前稿」とは、当拙稿を指す。
- (2) 八幡市立松花堂美術館図録「百人一首の世界 昭乗筆百人一首色紙帖を中心に」(八幡市立松花堂美術館、二〇〇六年)に図版掲載。
- (3) 定家様は、藤原定家の書風を模したものの。歌人としての定家への敬慕と相まって、愛好者は多かった。とくに茶の湯の席で好まれ、近世初期、小堀遠州などもよくした。
- (4) 小松茂美「松花堂昭乗 和漢朗詠卷」(日本書道教育学会『書学』一九八七年八月号)。
- (5) 『松花堂昭乗関係資料調査報告書』(八幡市、二〇〇二年)。
- (6) 佐藤虎雄「松花堂昭乗」(河原書店、一九三八年)。
- (7) 末宗廣「松花堂筆和漢朗詠集」(『茶道月報』一九三八年一月号)。
- (8) 『中京杉浦家所蔵品入札』(京都美術倶楽部、一九二九年)。
- (9) 『古典籍下見展覧大入札会目録』(東京古典会、一九九五年)。
- (10) 注6前掲書。
- (11) 昭乗が住持をつとめた瀧本坊に所蔵されていた什物の目録である、瀧本坊蔵帳の類には、世尊寺行能「朗詠集」、尊円親王「朗詠切」「朗詠詩四首、真行」「朗詠詩歌」「朗詠詩書」「朗詠詩歌 躑躅 款冬 藤」「朗詠 行霧曉籠」、近衛前久「朗詠」等、「和漢朗詠集」やその切れと思われる記載が多くみられる。昭乗がこれらの一部を眺め、また規範としていた可能性も大いにある。
- (12) 山田忠雄「吉利支丹版和漢朗詠集上の本文」(『迂人孟録』八、一九六四年)、土井忠生「和漢朗詠集卷之上」(『吉利支丹論考』三省堂、一九八二年)。両氏は、巻上夏部の朗詠題が「花橘」であるか「盧橘」であるか、という点に着目し、「室町時代は、その「盧橘本」が勢力を得た時期であったが、江戸時代に入つて出版されたのは、正徹本一本を除き、その他はすべて「花橘本」であった」(土井「和漢朗詠集卷之上」)と述べている。
- (13) 藏中しのぶは、「正保五年「尊円」A本(稿者注、正保五年刊『和漢朗詠集』)が、仙台伊達家旧蔵尊円法親王筆『和漢朗詠集』を原本として版行されるにおよんで、版本の世界に別系統の本文が流入することになる。これ以後、尊円系統の本文は青蓮院御家流始祖尊円法親王の名のもとに書道手本としての権威を保ちつづけ、版を改め筆者を変えて、江戸中期の流布本系統となつていった」と述べている(『和漢朗詠集』版本の本文—和歌の版本独自異文—寛永三系統を中心に、付、現存『和漢朗詠集』版本書目集覧—)(『大東文化大学紀要(人文科学)』二十八号、一九九〇年)。以下、本稿における藏中論文の引用はすべてこれによる。
- (14) 拙稿「瀧本流の流行と展開 付瀧本流法帖出版年表稿」(拙著『松花堂昭乗と瀧本流の展開』思文閣出版、二〇一一年)。
- (15) 鈴木健一「和漢朗詠集」版本考」(『汲古』十二号、一九八

七年十二月)、および注13前掲藏中論文。

- (16) 大阪古典會創立九十周年記念古典籍善本展観図録「落標」(大阪古典會、一九九二年)。「275『和漢朗詠集』 慶安二年刊 松花堂惺々筆版下 二卷」とあるもの。

- (17) 青裳堂書店古書目録「和漢朗詠集の版種」(青裳堂書店、二〇〇六年)。

- (18) 神作研「歌書の変遷—江戸前期を中心に—」(『調査研究報告』三〇号、二〇一〇年)。「近世和歌史の研究」(角川学芸出版、二〇一三年)「附編 歌書刊本考」。以下、本稿における神作論文の引用はすべてこれによる。

- (19) 注2前掲図録に図版所収。

- (20) 大和文華館図録「特別展松花堂昭乗 茶の湯の心と筆墨—」(大和文華館、一九九三年)等に図版掲載。

- (21) 大師流は、弘法大師空海の雑体書に基づくもので、独特の線のふるえやゆらぎを伴う表現が特徴的である。藤田友閑は、「祖師は大師行成を本とせられ」(和国筆道三秘鈔)と、昭乗の書の根源のひとつを空海に求めている。また、「本朝古今名古筆書流」「筆跡流儀系図」「流儀集」「古筆分流」等の書流系図では、昭乗の名を大師流の書き手としてあげている(小松茂美『日本書流全史』(小松茂美著作集)十五—十七卷(旺文社、一九九九年))。

- (22) 八幡市立松花堂美術館図録「松花堂昭乗の眼差し—絵画にみる美意識—」(八幡市立松花堂美術館、二〇〇五年)に図版所収。

- (23) 注22前掲図録に図版所収。

- (24) 川畑薫「書流・松花堂流における教授体系とその背景—寛文期・家元制度形成史一斑—」(『藝能史研究』一六五号、二〇〇四年)。

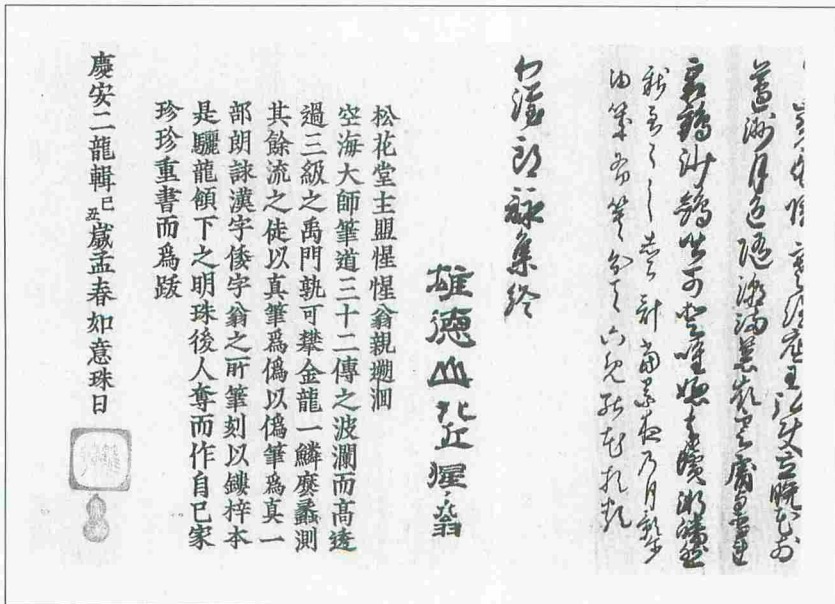
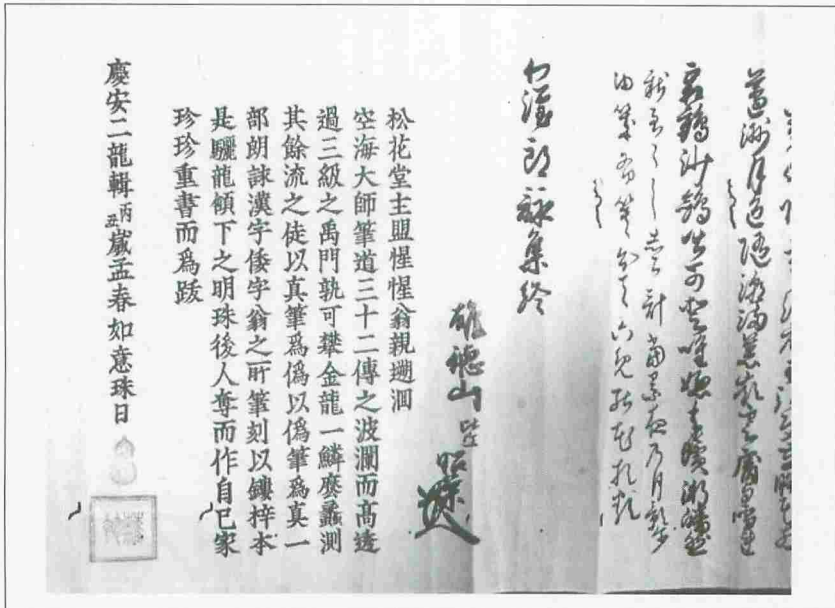
- (25) 「諸国」「京條里」「官名」は、手本として瀧本流において重視された。昭乗、および狂歌師で昭乗の高弟であった豊蔵坊信海が書した「百官名」(貞享二年(一六八五)六月奥。法政大学図書館蔵)も残る。拙稿「瀧本流高弟としての豊蔵坊信海—松花堂昭乗・豊蔵坊信海筆「百官名」を中心に—」(『国文学論考』四十九号、二〇一三年)参照。

- (26) 友閑は、「示愚息乘因及同志学者教誡條章」において、「行書の手本は末弟疎学の筆跡にて書べきものにあらざれば、先師御法帖を梓に鏤て授け侍り」としたうえで、とくに「八幡宮之手本」「国名之手本」「四恩法語之手本」「勸進帳二帖之手本」を版本手本として重視する旨を述べている。注24川畑論文に詳しい。なお、「松花堂法帖」のうち「国名 京條里 官名」は、国文学研究資料館蔵「百官表」を原本としていると思われる。

- (27) 川畑薫は、注24前掲論文において、「同じ刊行手本であっても、松花堂流という組織内で刊行されたものと、書肆を介したものとでは、異なる学習者層を生み出すことが窺われる」と述べ、流派内で刊行された手本と商業的手本とは、おのずから差のあることを指摘している。慶安二年刊卷子本もまた、冊子本とはその享受者を異にしていたと考えられる。

- (28) 鈴木淳「江戸の卷子本」(『文学』一〇巻四号、二〇〇九年)。「五筆花法書」には、「芙蓉峯隠士山地道輔景写書」と刻され




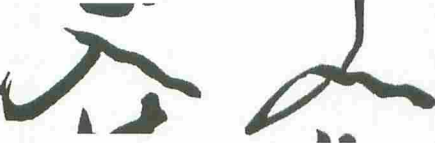

- る。注21前掲小松茂美『日本書流全史』所載「松花堂筆跡法帖」(安永七年(一七七八))の「筆伝系略」には、神立愚鈍について、「はじめ山地道輔と称す。名は正春、慕松堂と号す。又玄芝無能翁といふ」とある。なお、山地氏に關しては、中野三敏『和刻法帖 目録編』(日本書誌学大系一〇〇(一))。青裳堂書店、二〇一一年)所載「山地慕松堂伝」に、「先生は本姓宇佐美、世々官吏也。山地は養父の氏なり。薙髮して神立氏と称す。はた慕松の号は林家より賜れり」とある。
- (30) 愚鈍には、昭乗筆「詩歌卷」(逸翁美術館蔵)に奥書を付した例もある(『国文学研究資料館共同研究報告』5 逸翁美術館蔵国文学関係資料解題 明治書院、一九八九年)。
- (31) 八幡市立松花堂美術館学芸員川畑薫氏のご教示による。
- (32) このうち、愚鈍は、朗詠題「管弦」の詩「第一第二絃索々 秋風拂松疎韻落 第三第四絃冷々 夜鶴憶子籠中鳴 第五絃声尤掩抑 瀧水凍咽流不得」(引用は慶安二年刊卷子本による)の「秋風拂松疎韻落」までを、また、同「懷旧」の詩「黄壤誰知我 白頭独憶君 唯将老年涙 一灑故人文」の「唯将老年涙」までを書くが、慶安二年刊本では、それぞれ「秋風払松疎韻落」「唯将老年涙」で改行がなされている。愚鈍が慶安二年刊本を見ていたがために生じた誤りとも考えられる。
- (33) 「明衡往来」と『和漢朗詠集』の抄写各一軸からなる。
- (34) 小松茂美編『日本書蹟大鑑』十九卷(講談社、一九七九年)。
- (35) 小松茂美編『日本書蹟大鑑』十五卷(講談社、一九七八年)。
- (36) 『和漢朗詠集』、および『新撰朗詠集』の詩歌を抄写する。
- (37) 『和漢朗詠集』の詩歌のほか、『古文真宝』所収漢詩を書す。
- (38) 八幡市立松花堂美術館図録『はちコレ 八幡のコレクション —松花堂美術館の収藏品から—』(八幡市立松花堂美術館、二〇一四年)に図版掲載。
- (39) 乗淳は、昭乗の兄中沼左京元知の子で、昭乗の甥にあたる。寛永十四年(一六三七)十二月に昭乗が瀧本坊を退いてのち瀧本坊を継ぎ、また、藤田友閑とともに、昭乗没後の流派の形成に尽力した。
- (40) 『本朝名公墨宝』のうち下巻のみが『瀧本春風帖』(東京学芸大学附属図書館望月文庫蔵)として改題刊行されている。



(上) 岡本聡氏藏本

(下) 『和漢朗詠集の版種』掲載本 (青裳堂書店古書目録『和漢朗詠集の版種』より転載)

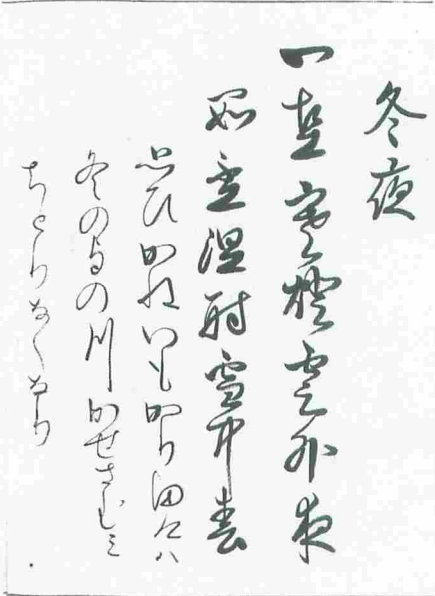
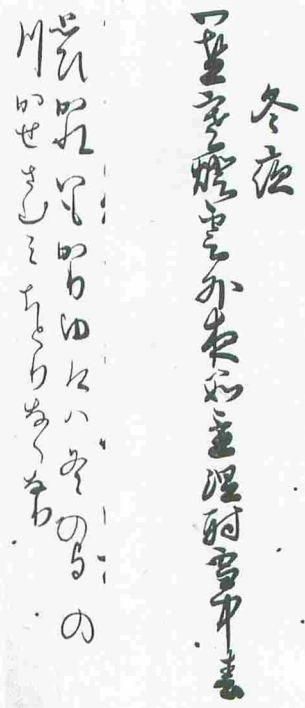
【図2】慶安二年刊卷子本の大師流表現の例

「風」				
戈 〔盛〕 〔裁〕		「也」		
「入」			「耳」	

慶安二年刊卷子本『和漢朗詠集』（岡本聡氏蔵）

【図3】慶安二年刊本と神立愚鈍写本

A

<p>神立愚鈍写「書法写」のうち「和漢朗詠集」 (八幡市立松花堂美術館蔵)</p>	<p>慶安二年刊卷子本『和漢朗詠集』 (岡本聡氏蔵)</p>
	

B

神立愚鈍写「書法写」のうち「和漢朗詠集」
(八幡市立松花堂美術館蔵)

慶安二年刊卷子本『和漢朗詠集』
(岡本聡氏蔵)

祝
 嘉辰令月歡無極
 萬歲千秋樂未央
 長生殿裏春秋富
 不老門前日月遲

きんかよはちよにやちるに
 さくれいのいそほとなりて
 こけのむすまて

祝
 嘉辰令月歡無極萬歲千秋樂未央
 長生殿裏春秋富不老門前日月遲

きんかよはちよにやちるにさくれいの
 いそほとなりてこけのむすまて

(やまぐち きょうこ・本学兼任講師)